

当報告の内容は著者の著作物です。

【報告書】

地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ

／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドネット・ラウンジ企画

地域の論理：「スーダン」における人々の営みを巡って

開催日時 2012年12月8日 10時半—17時

開催場所 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306

●概要

本企画は、50年以上にわたった内戦を経て、2011年に南スーダン独立という歴史的転換点を迎えた「スーダン」（現スーダン共和国、南スーダン共和国領域）を事例として、地域、そして地域固有の論理がいかにより形成されていくのかを、「スーダン」の各地域で調査を行ってきた若手研究者の発表を通して見て行くことを目的に開催された。

まず、趣旨説明において「スーダン」の歴史、地理的概要を説明し、地域の論理を見ていくうえで「スーダン」の事例が好適であることを述べた上で、「スーダン」という歴史、言語、地理的多様性を持つ場所を見ていくにあたって、ディシプリン、及び専門地域が異なる研究者による検討が有効なのではないか、という可能性を示した。

その後5人の発表が行われた。

1. The Dynamics of Political Mobilization Strategies in North Sudan: Examining the Impact of the Independence of South Sudan,

モハマド・アブディン、東京外国語大学大学院博士後期課程

2011年7月9日に南スーダン共和国が独立した。いうまでもなく、この出来事はアフリカの国家の在り方において、大きな問いを投げかける結果となった。北部スーダン地域においても、社会的、政治的、経済的構造変化がもたらされたことが先鋭化しつつある。

本発表は、北部県内の政治勢力が、南部独立をどのように受け止め、そして、どのように政治動員戦略に反映したかを分析することを目的としている。

本作業を通じて、南部スーダン問題が、独立以前に、ナショナルポリティクスにおける比重がいかなるものだったかを図ることができたほか、南部不在が、それぞれの政治勢力にどのような戦略の変更をせまったかについても明らかにすることができた。

主たる研究結果として、以下のポイントを取り上げる。

1. 政治動員戦略の中心にあった「イスラーム」は、独立以前と比較して、動員効果を失

いつつある。その理由として、「イスラーム化」に強い抵抗をしめしてきた南部勢力が、北部の政治に関与できなくなったからだ。

2. 南部独立によって、国家の収入が激減したため（国家収入の65%をしめていた石油収入の8割が南部油田からのものだった）、現政権は、「経済発展」を国民に約束することができず、結果として、経済的互惠関係を理由に政権を支持していた「クライアント層」が軽薄になることが不可避となった。

本発表は、まだ試行的なものであるが、筆者は、今後、分析を深めて、論文として発表することを計画している。

2. スーフィズムにおける包括性と排他性：タリーカ（スーフィー教団）にみる共同性と「スーダン」

丸山大介、京都大学大学院博士後期課程

本発表は、スーダンのスーフィズムとタリーカ（スーフィー教団）を事例に、スーフィーがどのような状況においてスーダンという地域を意識しているかという点をイスラームとの関係に着目しつつ考察することを目的とした。

スーフィーは、スーフィズムがスーダンにおけるイスラームの浸透と普及に果たした役割を強調する。つまり、スーフィーにとってスーダンという地域とイスラームとの結びつきは不可分であり、自明の論理として想定されていた。

スーフィーは理念上、神のもとでの平等、他者への愛、寛容や寛大、謙虚、誠実、正直などをキーワードに相対的他者との差異や非対称性を無化しようとする思想を説く。ここでは、ムスリムや非ムスリムとの区別を超えた包括性、相互尊重や相互扶助に代表される共同性が認識されている。

しかしながら、政治的文脈において、スーフィーは上述の理念と矛盾した態度を取る。1989年に成立したバシール政権は、南部との内戦や欧米諸国との対立関係において、シャリーアに基づく国家形成を模索していた。この政策に対し、タリーカは国民選挙などの機会に集会を開催し、政府に対する支持を表明すると同時に、政権運営に対する根拠を宗教的文脈から補強した。つまり、タリーカは政府の政治的正統性をイスラームの文脈から追認・再認する役割を担ったのだ。加えて、イスラームに対する外敵の存在を主張し、外敵の排除を強調していた。つまり、タリーカはイスラームの連帯とムスリムの一体性を強調すると同時に、非イスラームを排除する排他的な政策実施に加担してしまっているのである。

同様に、サラフィー主義者との関係においてもスーフィーは排他的な姿勢を示す。スーフィーはサラフィー主義者に対して否定的な意味合いの強い「ワッハーブ主義者」というラベリングを行い、テロや暴力、虚偽に代表されるネガティブなプロパガンダを行うことでサラフィー主義者の排除を企てる。彼らはサラフィー主義者を「イスラームの敵」であ

るだけでなく、「スーダンの統一を妨げる脅威」であるとも見なす。つまりスーフィーは、イスラームやスーダンが有する境界性を意識しながら、サラフィー主義者をその境界外へ排除しようとしているのである。サラフィー主義者もムスリムであり、本来であればイスラームの枠内に含まれる。しかしながら、スーフィーはサラフィー主義者の過激で厳格な姿勢を「誤ったイスラーム」と非難し、真正なイスラームと虚偽のイスラームとの二分法のもとに後者をスーダンとイスラームの両面から排斥しようとした。

スーフィーはスーダンとイスラームにおける自らの立場を正当化する上で、包括性と排他性という相矛盾する概念を状況に応じて使い分けていたのである。

3. 「スーダン」に生きる：移住者地区における人々の「移住」と「帰還」、そしてその後 飛内悠子、上智大学大学院博士後期課程

本発表はハルツームの移住者地区に住む人々のライフヒストリーと南スーダン独立に伴う「帰還」と独立後も残った人々の「その後」の状況を見ていくことによって、過渡期にある「スーダン」に生きることが彼らにとってどのような意味があるのかを見ていくことである。

2011年に南スーダンが独立する以前の「スーダン」は世界最大規模の国内避難民を抱える国であったといわれる。その中でも首都ハルツームには最大で200万人近い国内避難民を抱えていた。その多くが南部スーダン領域を出身とする「南部人」と呼ばれる人々である。だが19世紀植民地統治の都合によって「スーダン」という領域が出現した当初から南北間の人々の行き来は行われており、南部出身者たちは避難民としてハルツームに来るようになる以前から、奴隷や奴隷軍人、労働者としてハルツームに来ていた。ハルツームのマジョリティである「アラブ人」たちは彼らを「南部人」もしくは屋根のない場所で眠る者を示すシャンマーサという呼称で呼んでいた。

80年代後半から90年代にかけての避難民の大量発生、及び国際社会の動静があいまって、ハルツームで国内避難民という単語が認識されることとなる。だが80年代以降でも内戦だけが人々のハルツーム移住の直接の理由であったわけではない。内戦を背景としながらも人々は様々な理由でハルツームに来ていた。それは内戦中であっても北部と南部が様々な形につながりを保ち続けていたことを示しており、また多民族混住地区であるハルツームの移住者地区で暮らすことは否応なしに人々に「スーダン」の意味を問うこととなった。

また、2005年に内戦が終結した後、人々は徐々に南部へと「帰還」をはじめていたが、2010年10月、南部政府の帰還支援プロジェクト開始をきっかけとしてその動きが加速化した。が、人々は帰還支援の有無という経済的理由からのみ「帰還」を決定したわけではなく、帰還支援によって問われる自分の帰属を再認識し、自身の人生を鑑みながら個々の「帰還」のありようを創りだしていた。

そして南スーダン独立後も様々な理由でハルツームに残った南部出身者たちは、南部に

行くという選択肢もない西部やヌバ山地出身者と共に新たなネットワークを築いていた。だが2012年4月8日に南スーダン出身者のスーダン市民権が失効するという情報は広がっており、彼らもそれぞれの生活事情を考慮しながら「帰還」の選択を迫られ、決断していかねばならなかった。

このような人々の「スーダン」内での移動のあり方を見ていくと、歴史の変遷によって変わりゆく「スーダン」観を背景としながら人々が自分の生きる場所を選択していった過程が見えてくるだろう。

4. ジュバ民衆史に関する予備的報告：「脱部族化」した都市の過去と現在

仲尾周一郎、京都大学大学院博士後期課程

南スーダンの首都かつ中央エクアトリア州都であるジュバは同国最大の都市であるが、イギリス＝エジプト共同統治下の1920年代末に開発が開始された極めて新しい都市である。それ以前にはバリ人の小規模な集落、スーダン独立の1956年時点でも10000人超の河港都市であったに過ぎない。続く二度の内戦の中で、ジュバは南スーダンにおける経済や国際支援の拠点としての地位を獲得し、避難民や帰還民が多数流入したことで人口を増やしており、いわば「難民都市」としての性質が強い。しかし、近年バリ人コミュニティはジュバの(先住者としての)土地権などに関する南スーダンおよび中央エクアトリア州政府への要望の提出や、ジュバ市街中心地のジュベク(ジュバの語源となったバリの首長)墳墓を中心にバリ文化センター(仮)の建設計画などを行っている。この事例にみられるように、俄かに「難民都市」となる以前のジュバの歴史性が顕示的に語りだされつつある。

本発表では、これまで歴史的観点から研究されてこなかった、一部の都市民について注目した。1920年代末のジュバには、バリ人のほかに少数の植民地行政官、経済の大部分を牛耳った北部スーダン・ギリシャ・シリア系商人、そしてそれに加えて「マラキア」と呼ばれる区画に住む脱部族化した都市民が存在した。「マラキア」と呼ばれる都市区画は南北スーダンの主要都市に偏在し、「文民(退役軍人)居住区」を意味する。その名の通り、ジュバのマラキアの古くからの居住者は、多くが大工や整備士などの技術職を営む退役軍人であり、1920年代後半ジュバの開発に際して近隣の諸都市(モンガラやラド、レジャフなど)のマラキアから植民地行政官により移住を要請されてきた経緯があった。

ところで、オスマン＝エジプト統治期以降、スーダンではヌバ山地や南スーダン出身の解放奴隷からなる軍隊「ジハーディーヤ」が創設され、この軍隊内においてイスラームへの入信やアラビア語の母語化／クレオール化を伴う脱部族化が生じていた。後にジハーディーヤの一部は北部スーダンの「マラキア」に住み「脱部族化した黒人」と呼ばれる範疇をなし、一部は英植民地政策により東アフリカ諸国に移住させられ、現在では「ヌビ人」と呼ばれる「民族」を形成した。現在ジュバのマラキアの古くからの居住者は、「脱部族化した黒人」や「ヌビ人」同様に脱部族化し、アラビア語クレオールを母語とし、多くがム

スリムであり、彼らとの間にいくつかの特徴的な文化（憑依儀礼や舞踊、彫傷など）を共有している（実際に彼らとの親族関係を認める人々も存在する）点で興味深い存在である。

さらに、ジュバのマラキア居住者は新旧を問わず、血縁家族中にムスリムとキリスト教徒が共存し互いに学びあうことを善とする、顕著な宗教的寛容性を持つ傾向があることは特筆に値する。マラキア居住者の言説では、かつてマラキアは「象の胃」と綽名され、スーダン中のあらゆる民族が居住していた超民族的な都市空間であった。そのなかで育まれた「マラキア意識」が、北部スーダン主体の圧政にたいする反感へと繋がり、一部のマラキア居住者らを主体に初の南部人政党である「自由党」が形成されたとされる。

5. 「トライブ」をめぐる想像力：2011-2012年'Jonglei Crisis'における武力衝突、外部介入、スピリチュアル・リーダー

橋本栄莉、一橋大学大学院博士後期課程

2011年の独立以降、南スーダン・ジョングレイ州では家畜や子供の略奪をめぐる凄惨な武力衝突が相次いでいる。この衝突は国際機関、政府軍、地域行政や教会関係者などさまざまなアクターを巻き込むこととなった。中でも多くの人びとの関心の的となったのは、紛争に関与する重要な存在として政府軍に拘束されたヌエル(Nuer)出身のスピリチュアル・リーダーの存在である。

本発表の目的は、ジョングレイ州で生じている紛争の現状を報告しその特徴を描き出すとともに、武力衝突にかかわる複数のアクターが、スピリチュアル・リーダーの登場を契機に自らのかかわる「トライブ」なるものをどのように捉え、形づくってゆくのかを考察することにある。

一般に、この武力衝突はロウ・ヌエル(Lou Nuer)とムルレ(Murle)の民族集団間の報復闘争(revenge attacks)とみなされている。2011年、この衝突による死者は1000人を超え、避難民は10万人以上に達した。それ以前にも、ジョングレイ州では反政府軍の反乱のため数十万人が避難民となっており、このような「悲惨」な状況は、マスメディアなどによって“Jonglei Crisis”と表現された。しかし、2005年以降のジョングレイ州の状況をみると、この武力衝突は決して民族集団の間で生じているものとは捉えられない。国際機関、政府機関、反政府軍や政治的エリートなどの介入によって、状況はより複雑化し、これらの組織を通じた援助物資や武器の流通、武装解除の取り組みもまた、新たな紛争の温床になっている。一方、関与するアクターが増えるほど、この紛争は「トライブ」の間の問題として矮小化されて語られてしまう傾向にある。このような状況の下、紛争にかかわる多様なアクターはどのようにこの武力衝突や「トライブ」なるものを捉えているのだろうか。

さまざまな立場にある人びとに「トライブ」なるもの喚起させる契機の一つとなった

のが、ヌエル出身のスピリチュアル・リーダー、あるいは「予言者」(*gok*)と呼ばれる人物の登場である。この人物は、村落の若者を「魔術的」な力をもって動員したとして政府に目をつけられると同時に、さまざまな噂を巻き起こすことになった。

本発表で特に注目するのは、この人物をめぐる様々なアクターによる解釈である。一部の政治的エリートは、このスピリチュアル・リーダーを「魔術師」(*kujur*)とみなし、現代南スーダンの「トライブ」が抱える問題の一つであると捉えている。一方、ヌエルの予言者に祈るための「教会」(*dwil kuoth*)に集う人たち——年配者、避難民、都市の若者たち——は、現在生じている「戦い」(*kor*)における「ヌエレ」(*nuere*: ヌエル語を話す人々)と「ジェベ」(*jebe*: ムルレ語を話す人々)の関係を、過去のングンデンの言動の中に見出そうとしている。

ある「神話」的な連関の中で見出される「トライブ」なるもののありかたは、国際社会や政治的エリートなどが語る「民族集団」や「トライブ」のありかたとどのように異なり、また共通しているのだろうか。この点に注目することで、本発表では、「トライブ」をめぐる複数の想像力が交差する場として *Jonglei Crisis* を捉え直し、この想像力自体が独立後南スーダンに生きる人びとのあいだでいかなるリアリティを持ちうるのかを検討してゆく。

その後各発表を踏まえ、コメンテーターからのコメントを得たうえで総合討論をおこなった。

コメント、「スーダン」をめぐる交渉、競合、葛藤：ポスト内戦国における暴力の再歴史化、再政治化にむけて

内藤直樹、徳島大学大学院准教授

南スーダンの独立が果たされた「スーダン」における「生存者の正義」はいかにして可能だろうか？それは、①歴史的文脈の理解、②新たな政治的コミュニティの想像/創造、③民主化の実現に向けた国家の改革によってなされるのではないか。この点を踏まえたうえで各発表者に北部スーダンの政教分離や民主化が人々の日常といかに関わるのか？、ハルツームへの移住は単線的なものなのか？、難民都市としてのジュバの意味、「トライブ」と同様に「スーダン」をめぐる想像力も働くのではないか？という質問、コメントがなされた。

これに対し、各発表者が回答を行った後、「スーダン」という国家の成り立ち、「スーダン」における *tribe*、もしくは *ethnic group* のあり方、その普遍性と特殊性、「アラブ」という単語の意味の変遷などが論じられた。